様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３１２１

研究課題名（和文）「フロンティア社会論」再考――北洋漁業における季節労働者の個人史に着目して

研究課題名（英文）Frontier Society Revisited: Life stories on migratory workers on board

研究代表者
赤嶺　淳（Akamine, Jun）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：９０３３６７０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、秋田県と青森県からの出稼ぎ労働力が、戦後の日本水産業の基幹でもある北洋漁業と北洋捕鯨ならびに南氷洋捕鯨の重要な労働力であったこと、その貢献度に比して、その歴史的事実が全国的に知られていないばかりか、秋田県や青森県でも、県レベルではなく、各自治体の地域史として継承されていることをあきらかにした。その背景として、戦後の日本経済をささえた捕鯨業においては、花形である砲手ばかりが注目され、事業員としてひとくくりにされてきた各種の分業が等閑視されきたことが指摘できる。他方、プロの脚本家が個人史を収集しながら、地域史を舞台とした市民劇を上演するなど、個人史の用途が広がりつつある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの捕鯨史においては、捕鯨業の花形たる砲手ばかりが脚光を浴びてきた。砲手のほとんどは、長崎県や高知県、和歌山県など、いわゆる古式捕鯨時代からの捕鯨の伝統を継承する地域の出身者である。しかし、工船による遠洋捕鯨は、さまざまな労働が細かく分かれており、なかには季節労働者として乗船した者も少なくない。その代表が秋田県と青森県の農村から参加した人びとである。農家出身というのも、かれらが従事した職種が砲手ではなく、もっぱら工場の作業であったためである。これらの労働者が、高度経済成長期以前に、そうした農村における貨幣経済の浸透に一役買ったことは、あらためて考察する必要がある。

研究成果の概要（英文）：This research investigated roles of migratory workers from Akita Prefecture and Aomori Prefecture who went on board to Northern and Southern Oceans in pursuit of salmons and whales. These fisheries was operated by factory ships and thus highly labor-intensive, which needed lots of workers. Workers both from Akita and Aomori played important roles in such fisheries which earned lots of foreign currency. However, such historical fact is hardly unknown neither national nor prefectural level. It may probably be due to the fact such recruiting having done by personal networks. Thus, it is necessary to collect as many personal histories as possible. Along with academic interests, civil drama groups are interested in performing their histories depending on such oral histories collected by themselves. Such activities should be collaborated with academic activity, which will open possibility of local history studies.

研究分野：食生活誌学

キーワード：食生活誌学　季節労働者　高度経済成長　遠洋捕鯨　貨幣経済

１．研究開始当初の背景

資本、商品、人、情報などが瞬時に越境するグローバリゼーションなる現象は、いまや日常的なものとなっている。しかし、単にグローバリゼーションとして括られる現象にも、国家や地域によって差異があることが察せられる。本研究では、（1）ユーラシア大陸東岸における「歴史世界としての海域世界の連鎖」の史的動態を仮定し、（2）東南アジア地域研究の分析枠組である「フロンティア社会論」を、グローバル化時代における地域間比較研究の通時的分析枠組として発展的に練りなおすことにある。具体的には、(a)「日本の水産業が近代化する過程で、北洋から南洋へと鎖状に推移した『フロンティア漁場』の開発にともない、変容していった資本と労働力の多様性と循環性の相関動態をあきらかにし、（b）グローバリゼーションという学際的課題群の考察においては、個人史・家族史の分析を軸とする比較研究が有効であることを実証することを目指した。

２．研究の目的

上記のように「グローバリゼーション」として一括りにされる現象の地域性と歴史性をあきらかにするため、ユーラシア大陸東岸に位置するベーリング海から、日本列島を南下し、東南アジアの島じまとオーストラリア大陸をつなぐ南極海までの漁場の開拓史を、1990 年代の東南アジア研究で注目された「フロンティア社会論」を精緻化することにより、これらの海域の連鎖を、ひとつの歴史的世界として提示する。具体的には、サケマス、カニを中心とする北洋漁業、鯨類を中心とする北洋捕鯨、カツオマグロ類を中心とする南洋漁業、鯨類を中心とする南氷洋捕鯨に着目し、資本と人、商品が移動する政治経済の動態を把握するとともに、そうした移動を支えた社会的要因をあきらかにすることを目的とする。当然ながら、150 年におよんだ、壮大なスケールの社会経済史の再構築という作業を研究代表者と研究分担者の 2 名でおこなえるはずはなく、大きな見取り図のもと、個人史という具体的な歴史を、いかに国家なり地域の歴史と接続しうるのか、その方法論の検討を中心としたい。

３．研究の方法

季節労働者（出稼ぎ者）の個人史を軸にフロンティア漁場の開発史を俯瞰し、地域間比較研究の通時的分析枠組としての「フロンティア社会論」を発展的に精緻化しようとする本研究は、（1）北洋漁業を端緒として近代化を果たした日本の水産業が、魚種・漁法を転換しながら、つぎつぎにフロンティア漁場を開拓していったマクロな政治経済過程をレビューし、(2) その多様な動態を季節労働者の語りからミクロに分析し、(3) ユーラシア大陸東岸を北から南へ南下した資本と労働力の移動の政治経済的力学の諸相をあきらかにした。また、手法開発を目的とする意味から、（a）関係文献のレビュー、（b）個人史・家族史の採録・分析、（c）関係史料のアーカイブ化という基礎作業をおこなった。この基礎作業を土台として、将来的には、アラスカからオーストラリアを舞台とした「環太平洋西部海域におけるフロンティア資源をめぐる資本と技術、人口移動に関する総合的研究」に発展させていきたいと考えている。

４．研究成果

研究代表者の赤嶺は、北洋捕鯨と南氷洋捕鯨に多数の季節労働者を輩出した秋田県大仙市の旧刈和野町地区において、2016 年度より継続的に季節労働者の個人史を収集するとともに、秋田県の代表的な地方紙である『秋田魁新報』に掲載された出稼ぎ関連の記事を精査した。その結果、戦後に刈和野地区から多数の出稼ぎ捕鯨者を輩出したのは、大洋漁業が遠洋捕鯨を拡大した 1954 年のことであったが、その年が、折しも北海道のニシン漁の不漁期と重なっていたこと、移動人口規模においては圧倒的にニシン漁が巨大であったためか、捕鯨業への出稼ぎに関する記事が非常に少ないことをあきらかにした。このことは、新聞に掲載された記事のみならず、各自治体の史誌の記述にもあてはまることである。他方、季節労働者として捕鯨に出漁した人びとや関係者の家族のあいだでは、現在でも、さまざまな逸話が継承されており、地域史と個人史のあいだのギャップと、わたしたちが地方史を記述する際に依拠する史誌料の限界について考察をせまられるにいたった。

このことは、地域の歴史を継承し、その延長線上に地域の歴史を展望する作業として位置づけが可能な「地域おこし」における個人史の重要性をも喚起する。刈和野地区同様に多数の季節労働者を輩出した青森県八戸市の旧南郷村においては、八戸市が同地区の地域おこしを目的として、2018 年 10 月 20 日から 11 月 11 日まで開催した南郷アートプロジェクト「なんごう小さな芸術祭」の一環として、中屋敷法仁氏が脚本・演出した市民劇『くじらむら』が 10 月 27 日・28 日に上演された。赤嶺は、南郷アートプロジェクトが市民劇をたちあげる企画の初期からかかわる機会を得、捕鯨史に関する助言をおこなうとともに、上演後に開催された中屋敷氏とのトークショーに出演し、市民劇の時代背景や南氷洋捕鯨の、日本の水産業における位置づけ、昨今の

捕鯨問題の展望について解説する機会を得た。『くじらむら』の観劇者のほとんどが、80 歳以上の、かつての捕鯨者もしくは関係者であり、往事を思い出し、涙する人も少なくなかった。中屋敷氏との議論のなかでも、地域史を主題とする演劇が地域おこしの手法として有効であることが確認でき、研究成果の還元方法のひとつとして、今後も、こうした活動に積極的に協働すべきことを痛感させられた。

研究分担者の椙本歩美は、秋田県大仙市および仙北市で、季節労働（出稼ぎ）に関する聞き取り調査をおこなった。仙北市では、季節労働をおこなったことがある 60 代～70 代の農家 5 軒（夫婦）のライフストーリーの採録をおこなった。また、季節労働ではなく県内外の都市部で就労したのち、帰村した子や孫のライフストーリーの採録も 2 軒おこない、世代間で労働の移動のあり方がどのように変化したのかについても比較した。これにより、秋田県内の農村の多様性や可変性について、議論を深めることができた。今後の課題としては、個人や世帯の労働形態の背景にある社会的な要因についても分析を広げ、より多層的な視点から秋田の農村について理解を深めることが指摘できる。また、海外の農村部（とくに通年農業が不可能な北部を中心に）の事例研究をおこなうことで、これらと比較し、秋田の季節労働の特徴と普遍性について議論を深めていきたいと考えている。

また、本研究を広く社会に還元するための取り組みとして、秋田県内で授業・公開講座・公開セミナーを実施した。具体的には、国際教養大学の環境科学の授業で、北洋漁業（とくに捕鯨）について学ぶ機会を設け、その一環で開催した公開講座には、50 名ほどの参加者があった。また秋田市のカレッジプラザで、一般向けの公開セミナーを開催した。とくに 20 代を中心とした若い世代に、研究成果を広げるための試みであったが、ひきつづき、研究成果の多様な社会還元のあり方を模索する必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 16 件）

1 赤嶺淳, 「近代捕鯨のゆくえ――あらたな鯨食文化の創発」, 『国立民族学博物館調査報告』149: 印刷中（2019 年 6 月）. ［査読有り］

2 赤嶺淳, 「ふたつの塩くじら」, 『科学』12 月号：1239-1241, 2018 年 11 月. ［査読無し］

3 赤嶺淳, 「瓦解を生きる術――マツタケに学ぶ柔靭さ」, 『食品・食品添加物研究誌 FFI ジャーナル』223(3): 259-267, 2018 年 8 月. ［査読有り］

4 赤嶺淳, 「「ナマコの知」をもとめて――東アジアにおけるナマコ世界の多様性」, 山田勇・赤嶺淳・平田昌弘編, 『生態資源――モノ・場・ヒトを生かす世界』, 昭和堂, 288 頁（19-54 頁）, 2018 年 5 月, 978-4812217030. ［査読無し］（図書所収論文）

5 赤嶺淳, 「キノコに学ぶサバイバル術――不確実な時代を生きる」, 『ビオストーリー』28: 72-73, 2017 年 11 月. ［査読無し］

6 赤嶺淳, 「プロが支える鯨食文化」, 『Vesta』108: 34-37, 2017 年 10 月. ［査読なし］

7 赤嶺淳, 「みずからの歩みをつづる――沿岸捕鯨の歴史を見なおす試み」, 『石巻学』3: 53-55, 2017 年 8 月. ［査読無し］

8 赤嶺淳, 「終焉なきフロンティアとしての漁業」, 山本信人監修, 井上真編, 『東南アジア地域研究入門 1　環境』, 慶応義塾大学出版会, 368 頁（分担 133-151 頁）, 2017 年 3 月, 978-4766423945. ［査読なし］（図書所収論文）

9 Akamine Jun. “The Role of Sama/Bajaus in Sea Cucumber Trades in the Sulu Sultanate Economy: Towards a Reconstruction of Dynamic Maritime History in Southeast Asia.” *Sabah Museum Monograph* 13: 151-163. March 2017. [Peer reviewed]

10 赤嶺淳,「ナマコとともに――モノ研究とヒト研究の共鳴をめざして」, 秋道智彌・赤坂憲雄編, 『人間の営みを探る』, フィールド科学の入口, 玉川大学出版部, 全 224 頁（分担 114-148 頁）, 2016 年 6 月, 978-4472182051. ［査読無し］（図書所収論文）

11 Akamine Jun. “Shark Town: Kesennuma’s Taste for Shark and the Challenge of a Tsunami,” in Lum, Casey Man Kong and Marc de Ferriere le Vayer eds., *Urban Foodways and Communication: Ethnographic Studies in Intangible Cultural Food Heritages around the World*, Lanham: Rowman and Littlefield, 238pp.(pp. 71-85), June 2016, 978-1-4422-6642-1. [Peer reviewed] (Book chapter)

12 赤嶺淳, 「ケーススタディ・ナマコ」, 中野秀樹・高橋紀夫編, 『魚たちとワシントン条約――マグロ・サメからナマコ・深海サンゴまで』, 水産総合研究センター叢書, 文一総合出版, 全 224 頁（分担 187-199 頁）, 2016 年 4 月, 978-4829965276. ［査読無し］（図書所収論文）

13 椙本歩美,「戦争体験の語り部になる――秋田市「語り部の会」設立者のオーラル・ヒストリー」,『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』7: 73-89, 2018 年 9 月. ［査読無し］
14 椙本歩美, 「共に平和を想う－秋田の多文化な大学教育の可能性」, 『国際人流』364: 26-31, 2017 年 9 月. ［査読無し］
15 椙本歩美, 「子が語る父親の戦争――秋田の農村における記憶の継承」, 『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』5: 1-14, 2017 年 8 月. ［査読無し］
16 椙本歩美,「参加型森林政策における包摂と排除――フィリピン中部ルソンにおける権利付与を事例として」,『林業経済』70(4): 7-22, 2017 年 7 月. ［査読有り］

〔学会発表〕（計 20 件）
1 赤嶺淳, 「ノルウェーにおけるミンククジラ漁と鯨肉のサプライチェーン」, 北海道大学低温科学研究所グリーンランド集会, 北海道大学低温科学研究所, 2018 年 12 月 19 日. ［招待講演］
2 Akamine Jun. "Minke Whale Meat Supply Chain in Contemporary Norway, " read at the Whaling Activities and Issues in the Contemporary World, at National Museum of Ethnology, Suita City, Osaka Prefecture, on Dec. 1, 2018. [Invited lecture]
3 赤嶺淳,「高度経済成長期の食生活の変化を聞き書く――食生活誌学のこころみ」, JOHA16 シンポジウム「食に聴く・食を書く――食の媒介者たちをめぐる歴史と社会, 日本オーラルヒストリー学会第 16 回大会 (JOHA16) , 東京家政大学, 2018 年 9 月 2 日. ［招待講演］
4 Akamine Jun. "Multiplicities of Japanese Whaling：A Case Study of Baird's Beaked Whaling and its Foodways," read at the New Histories of Pacific Whaling: Cross-Cultural and Environmental Encounters, Session 4: Oil, Wax, and Meat, at East-West Center, The University of Hawai'i – Mānoa, Honolulu, HI, USA, on June 29, 2018.
5 Akamine Jun. "Inheriting Sea Cucumber and Shark Fin Foodways in the Age of Environmentalism, " read at the Sun Yat Sen University Second International Conference on Food and Culture: People, Ecology and Food, Panel 16: Unforgettable Chinese Food, at Martin Hall, Ground floor, SYSU, Guangzhou, Guangdong Province, Peoples Republic of China, on April 20, 2018.
6 Akamine Jun. "Call for Responsible Consumption of Sea Cucumbers for Conserving Cultural Heritage in Asia," read at the "Chinese Overseas: Global and Local Dynamics" the 11th Regional Conference of the International Society for the Study of Overseas Chinese, Nagasaki University, Nagasaki City, on November 19, 2017.
7 赤嶺淳, 「ナマコ食文化の歴史と未来――「持続可能な利用」をめざして」, 中華の魅力　乾貨の秘密～アワビ・フカヒレ・干ナマコ（プログラム A-1）, 第 4 回全日本・食サミット, 東京誠心調理師専門学校, 2017 年 10 月 29 日. ［招待講演］
8 Akamnie Jun. ”Whale oil had gone: Changes of whaling and whale meat foodways in Japan,” read at Navigating Food Studies in East and Southeast Asia Workshop, Tembusu College, National University of Singapore, at Singapore on March 16, 2017. [Invited lecture]
9 Akamine Jun. “Beyond the “Super Shark” Myth: Promoting Sustainable Shark Foodways in Japan and Asia,” read at Exchange and Dynamism of Food Culture in Asia: Past, Present and Future, The 6th Conference on Foodways in Asia, at Epoch Ritsumei, Kusatsu City, on Dec. 4, 2016.
10 Akamine Jun. “Promoting Sustainable Shark Foodways in Japan against Global anti-Shark Fin Campaign,” read at Food & Society 2016, at Hotel Bangi, Putrajaya, Malaysia, on Nov. 20, 2016.
11 赤嶺淳, 「気仙沼におけるサメ産業の復興――反フカヒレ運動下におけるサメ食文化促進」, 国際シンポジウム「東アジアの食文化交流」, 慶応義塾大学, 2016 年 10 月 2 日.［招待講演］
12 赤嶺淳, 「日本の「捕鯨問題」の分析視角――ノルウェーの事例を参考に」, 2016 年度アイスランド学会総会, 一橋大学佐野書院, 2016 年 6 月 24 日. ［招待講演］
13 Akamine Jun. “The Role of Samas/Bajaus in Sea Cucumber Trades in the Sulu Sultanate Economy: Towards a Reconstruction of Dynamic Maritime History in Southeast Asia,” read at International Conference on Bajau-Sama' Diaspora & Maritime Southeast Asian Cultures (ICONBAS-MASEC 2016), at Tun Sakaran Museum, Semporna, Sabah, Malaysia on April 22, 2016.
14 Sugimoto Ayumi. “Succeeding the Farm Family by Creating New Life: Two generations of farm inn owners in Akita,” read at the 117th Annual Meeting for

American Anthropological Association, San Jose Convention Center, California, USA, on November 17, 2018.

15 Nancy Rogenberger and Ayumi Sugimoto. “Creating Internal Heterotopia: Local Farmers Treading Various Paths to Neoliberal Revitalization,” read at the 117th Annual Meeting for American Anthropological Association, San Jose Convention Center, California, USA, on November 17, 2018.

16 Sugimoto Ayumi. “Rural Tourism as a Sustainable Alternative?” Economics and International Studies Autumn Seminar Series, The University of Buckingham, UK, November 7, 2018. [Invited lecture]

17 椙本歩美,「農家を継ぐ女性たち――農家民宿経営をめぐる多世代ライフストーリー」，日本オーラル・ヒストリー学会第 15 回大会（JOHA15），近畿大学，2017 年 9 月 3 日.

18 椙本歩美，「英語で学ぶ秋田学――地域に根差したグローバル教育の挑戦」，第 23 回大学教育研究フォーラム，京都大学高等教育研究開発推進センター，2017 年 3 月 19 日.

19 椙本歩美,「フィリピン一村落内における多様な農業雇用労働――タルラック州 M 村の田植えを事例として」，2016 年度アジア政経学会秋季大会，北九州国際会議場，2016 年 11 月 19 日.

20 Sugimoto Ayumi. “Rural Women Food Entrepreneurs: Traditional Skills, New Fulfillment,” read at the 15thCongress of the International Society of Ethnobiology (ISE), Kampala, Republic of Uganda, August 2, 2016.

〔図書〕（計 2 件）

1 赤嶺淳，『鯨を生きる――鯨人の個人史・鯨食の同時代史』，歴史文化ライブラリー445，吉川弘文館，283 頁．2017 年 3 月，978-4642058452．［査読なし］

2 椙本歩美，『森を守るのは誰か――フィリピンの参加型森林政策と地域社会』，新泉社，　344 頁，2018 年 7 月，978-4787718112．［査読無し］

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：椙本歩美

ローマ字氏名：（Sugimoto, Ayumi）

所属研究機関名：国際教養大学

部局名：国際教養学部

職名：助教

研究者番号（8 桁）：90648718

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。